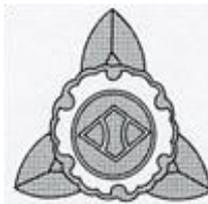


小須戸小学校だより

NO.9

令和4年3月22日(火) 発行



子どもの力を信じて

校長 中林 浩子

コロナ禍となって2年、マスク・手洗い・換気は、学校の日常に位置付きました。また、教育活動は、「神経質になりすぎず、でも慎重に!」をモットーに、校外学習や学級・学年での交流活動なども感染症対策を講じながら積極的に行ってきました。

「運動会」や「こすどっ子祭り」、「6年生ありがとう週間」に代表されるように、子どもたちは、「今、できること」の中から、知恵を出し合い、創意工夫をしながら、学校生活を送ることができました。

それは、保護者や地域の皆さまの教育活動に対する多くのご理解とご協力、応援があったからこそです。その思いに私たち教職員は、何度も励まされ、勇気づけられました。そのお陰で、子どもと教職員とが一緒になって創り上げる新しい教育活動にチャレンジすることができたと思っております。保護者・地域の皆さまに心より感謝申し上げます。

さて、小須戸小学校では、“自分の『学び』や『生活』を自ら舵取りできる子どもの姿”を目指して、授業改革や生活指導、教育活動を行っています。「子どもが学びや生活を自ら“舵取りする”なんて、本当にできるの?」「それは、聞こえはいいけれど、先生がラクをしたいだけなんじゃないの?」と心配や不安を抱かれた方もおられるかもしれません。確かに、保護者の皆さんやその上の世代の方々が受けた学校教育は、先生の言うことをよく聞いて、先生のいうとおりに学習し、生活することがいいことだと教わってきました。「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきたからです。その結果、日本は、経済や技術が大きく発展しました。そして、これから、Society5.0時代へと動き出そうとしたとき、新型コロナウイルス感染症により、社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難な時代と言われるようになりました。

今、当校で学んでいる子どもたちが大人になって、社会を支えるようになる頃には、きっと、想像もできないくらい社会生活は変化していることでしょう。

このようなことから、当校では、子どもが直面するであろう10年後の未来を見据え、“自分の『学び』や『生活』を自ら舵取りできる子どもの姿”を目指して教育活動を推進しています。“舵取りする”とは、子どもが自分の学習や生活に主体的に取り組み、自分の行動や言動に責任をもつことです。それができるようになるためには、安全な失敗つきの体験をたくさん経験することを積み重ねてこそ、よりよい方法や望ましい選択の仕方を学んでいけることだと考えます。ですから、学校は、間違ふところでなければなりません。子どもが、安心して間違ふたり、失敗したりしながら、仲間と互いに成長していく場所、それが学校たる所以だと考えます。授業も生活も同じです。教師の仕事は、子どもの失敗や間違いを「新しいことを学ぶチャンスだ!」と見方を変えて、次に同じことが起こったら、どうしたらいいか、具体的な方法をイメージできるところまで、子どもと一緒に考え、それができるように励ますことです。先生の許可がないと勉強や生活ができない子どもに育ててはいけません。人は、誰もが、自分で解決する力をもっています。誰もが、よくなりたくて願っています。そういう子どもの力を信じて、これからも小須戸小学校は教職員一丸となって、適応支援と成長支援の両面から子どもが学習と生活を自ら舵取りできる力を育てていきます。

最後になりますが、今年度の教育活動に対して、保護者・地域の皆さまの温かいご理解とご協力に改めて感謝申し上げます。一年間、大変ありがとうございました。



自分たちの思いを形にしたこすどっ子祭り

児童会主任 山代 仁美



12月から1月にかけて各学級で準備をし、令和3年度のこすどっ子祭りを実施しました。今年度も昨年に引き続き、コロナ禍での実施となりました。実行委員を立ち上げ、「行事が今まで通りできないことが多いけれど、何とか全校のみんなの思い出に残るものにしたい。」「なるべく多くの人活躍できるような場にしたい。」という、子どもたちの強い思いからスタートしました。

スローガンは「コロナ禍でも全校が楽しめるこすどっ子祭り」に決まりました。今年度もリモートで実施することに決め、昨年取り組んだ動画にアートを加えることにしました。運動会では運動が得意な人が活躍できるように、人前に出るのが苦手な人や運動よりも創作活動が得意な人が活躍できる場になるのではないかとこの考えから出された意見でした。アートにも様々な種類がありますが、壁面アートと黒板アートから選択できるように計画しました。

本番では、各学級、個性あふれる動画作品・アート作品が出来上がりました。どの作品も学級ごとのテーマがあり、何より子どもたち自身が楽しんで参加したことが伝わる作品ばかりでした。他の学級の作品を見る姿も笑顔が溢れており、大成功のこすどっ子祭りとなりました。保護者の皆様にもお子さんと一緒にロイロノートを使ってご覧いただけるよう計画しました。一緒に楽しんでいただけたでしょうか。

年間を通してたくさんの学校行事があります。次年度も子どもたちが主体となり、自分たちのやりたいことや伝えたい思いを形にし、自信を育む機会となるよう、教師と子どもたちで協力して小須戸小学校の伝統を引き継いでいきます。



コロナ禍で大勢の人が集まることができないので、動画とアートにしよう、実行委員のみんな考えて案を出しました。初めての黒板アートはとても楽しかったです。他学年の友達が「6年生の動画面白かったね」と話しているのを聞いてうれしかったです。
(実行委員長 6年 野崎さゆり)

黒板アート部門では、学級の担当で話し合い、春夏秋冬に分けて描くことにしました。低学年の友達が「上手だね」と言ってくれてうれしかったです。最初は、出店ができなくて悲しかったのですが、思い出に残るこすどっ子祭りになりました。
(実行委員 6年 古寺芽彩)

自分たちで創り上げた六送会



児童会副主任
平澤素陽



2月28日(月)～3月9日(水)に令和3年度6年生を送る会(以下「六送会」という)を「週間」で実施しました。

六送会を実施するにあたり、12月に担当としての思いを語り、「どのような会にしたいか」、「6年生にどんな思いを伝えたいのか」、を子どもたちに投げかけました。そして、対面式で直接顔を合わせて、6年生に「感謝の気持ち」や「中学校に行っても応援している」という思いが伝わるような六送会をみんなで考えることにしました。

子どもたちは、感染が拡大しても「6年生と顔を合わせて思いを伝える」六送会が実施できるように「集会での実施」と「対面式での週間」の2つを計画しました。結果は、まん延防止等重点措置が要請されるほどの感染状況により「非対面式の週間」に変わりました。

しかし、子どもたちはコロナ禍の逆風をチャンスに変え、非対面になるからこそ、6年生に思いを伝えるにはどうすればよいかを各チームで話し合いました。記録撮影担当の子どもたちは、在校生の思いをより伝えるために、6年生に向けて準備している様子を動画にする企画をしました。飾り付け担当の子どもたちは、六送会が終わっても華やかな気持ちになれるように校舎内を花紙や折り紙の花で鮮やかにしたり、全校が参加できるような飾り付けの企画をしたりしました。自主的に話し合い、行動する姿はまさに最高学年そのものでした。今年だけの運動会や小須戸っ子祭りを創り上げた6年生の背中を見て学んだからこそだと思います。

限られた時間の中で、子どもたちは自ら考えより良い方法を試行錯誤しながら一生懸命に取り組みました。

担任として、子どもたちと一緒に六送会を創り上げることができたことに、感謝しています。

私の成長

5年1組 藤田 雫

今まで人前で話すことが本当に苦手で、何かをすすめられたときもどうしようと悩むくらい、人前で話すのが苦手でした。ダンスリーダーに決まったときも「できるかな…できないかもしれない…。失敗したらどうしよう…」と色々考えてしまいました。でも、決まったことはやるしかないと思い、家でたくさん練習しました。弟たちも一緒にダンスをしてくれて、家族も応援してくれました。そのおかげでいつの間にかダンスや発表が楽しみになりました。人前での発表がすごく苦手だった私に自信がつくと、自分の意見もしっかりと言えるようになりました。すごく成長したと思います。自分に自信をもち、失敗を恐れず、いろいろなことに挑戦していきたいと思います。下級生も私みたいに「自分に自信がなくて、失敗したらどうしよう…」と考えてしまう子もいると思います。その下級生に「大丈夫だよ。間違えても誰も笑わないよ。」と自信をつけてあげたいと思います。